經濟論叢

第九十八巻　第二號

ドイツ経営学と経営意志決定の問題……山本安次郎　1

中国経済見聞記……松井　清　25

社会化の挫折とその思想的根拠……阪上　孝　37

ローザ・ルクセンブルクの
　ポーランド革命論……竹本信弘　55

昭和四十一年八月

京都大學經濟學會

ローザ・ルクセンブルクのポーランド革命論

——若きローザの思想と行動 (2) ——

竹　本　信　弘

Ⅳ　方法意識の確立

わたしは前稿第Ⅱ節および第Ⅲ節において，ポーランドにおける若きローザの行動にとって，何が，どのように，問題であったのかを検討した[1]。では，このような行動上の問題を解決しようとして，かの女は，どのように問題に接近し，どのように問題をたててゆくのであろうか。この節のわたしの課題は，ローザ・ルクセンブルクの方法意識を，若きローザのポーランド論のなかからはっきりとつかみ出すこと，これである。

さて，ローザ・ルクセンブルクの方法意識といっても，それは，かの女の頭脳のうちに突如として宿ったものではない。かの女は，ポーランド民族主義潮流 PPS および——そしてとりわけ——マルクス・エンゲルスのポーランド論を方法的に克服してゆく努力のうちから，自分自身の方法を積極的にあみだしていったのである。そこでわたしは，かの女のこのような方法的努力の跡をたどり[2]，そのなかに，従来のポーランド論に対する若きローザの方法的批判の

1)　拙稿，ポーランド社会主義運動とその思想，「経済論叢」第98巻第1号。

2)　ローザ・ルクセンブルクは，これまでのポーランド論を批判してつぎのように述べている——「ポーランドの民族的努力に関して西ヨーロッパの社会主義者が抱いている多くの見解（—それは，とりもなおさずマルクス・エンゲルスのそれであるが—引用者）は，非常に特徴的な事実を示している。すなわち，《ポーランドにおける》民族的努力のもつ内的社会的性格が，《ヨーロッパにおける》国際関係のなかで果すポーランドの役割に従って判断される，これが普通である。」(R. Luxemburg, „Der Sozialpatriotismus in Polen", *Die Neue Zeit*, Jg. 14, Bd. II, 1896, S. 463. 以下この論文は „Sozialpatriotismus" と略す。) そこで「マルクスとエンゲルスの見解からは，せいぜいのところ，ポーランド再建の《願望》がうかがわれるだけであるなどといえば，これについては，おそらくあれこれの見解があるであろう。しかし，願わしいことがすべてその故に可能であるとはかぎらないし，そして絶対に可能であることも，とくにプロレタリアートにとって可能であるとはかぎらないのであって，社会愛国主義者はこのことを忘れてしまっている。だが，他の誰でもなく，まさにマルクスとエンゲルスこそが，始めてつぎのことを教えてくれたのであった。すなわち，労働者階級は，願わしいことを実現したいという単なる意志

性格をうかがうことにしよう。すなわち，——

かの女にとっては，マルクス・エンゲルスのポーランド論にしてもポーランド民族主義潮流 PPS のそれにしても，そのいずれの政治方針も，ポーランド社会の客観的な物質過程とその矛盾のうちから，それ自身の内的必然性にしたがって，提起されたものではなかった。だからかれらの議論は，ポーランド社会にとって外面的なままにとどまっており，ポーランド・プロレタリアートの直接にはあづかり知らないところであった。このようにかの女は，かれらの立場が超越的であることを示し，みずからのそれをポーランド社会の物質過程のうちに深く内在させようとするのである[3]。

さらにかの女にとって，マルクス・エンゲルスのポーランド論は，所詮，《願望》論でしかなかった。闘うヨーロッパ・プロレタリアートの革命戦略を前提し，それから演繹されるポーランド独立のスローガンは，そのかぎりでは，ヨーロッパ・プロレタリアートの対外政策上の主観的《願望》であるほかはなか

・単なる願望を自分たちのあらゆる努力の動輪とするのではなくて，現実の社会的発展過程の物質的諸関係を規準として考えなければならないということを。この現実の社会発展の物質的諸関係こそが，そしてそれのみが，願わしいものが可能でもあるのかどうかを規定し，さらに可能なものを歴史的に必然でもあるものに転化するのである。しかし，ひょっとして起るかもしれないポーランドの再建について非常によく引用される見解では，ポーランドの物質的発展およびこの発展から生ずるポーランド・プロレタリアートの直接的任務は，多くのばあい考察されていないのであって，このことははっきりしている。ここで語られているのは，ポーランドのプロレタリアートについてでもなければ，ポーランド・プロレタリアートの日々の階級的闘争についてでもない。ここでは，プロシャについて，ヨーロッパ外交について，戦争について，語られているだけである。ポーランド再建がヨーロッパにとってどうしても不可欠であると考えているものはすべて，ポーランドの再建を戦争に期待しているのだ。このような期待について，人がどのように考え，どのように欲しようとも，……第1に，期待は根本原理ではないし，まして社会民主党の原則となるものでは決してない。……第2に，戦争が綱領どおりに社会民主党の満足のいくように運ばれるものでない以上，きたるべき戦争の結果は，社会民主党の綱領の落磯として役立ちうるものではない。……したがって，科学的社会主義の創始者たちの見解は，ポーランド・プロレタリアートの日々の実践的綱領に対する指針として解釈されるものではないし，決してそのように解釈されてはならないのである。というのも，かれらは，ただ対外政策の上で起るかもしれない事態をひきあいに出しているだけであって，なにもポーランドの社会的発展過程の結果やその内部の階級闘争にかかわっていないからである。」(R. Luxemburg, „ Neue Strömungen in der polnischen sozialistischen Bewegung in Deutschland und Oesterreich", *Die Neue Zeit*, Jg. 14, Bd. II, 1896, SS. 213–214. 以下 „ Neue Strömungen " と略す。)

3) たとえば，かの女はこうもいっている。「われわれは，ポーランド統一のための努力が《ヨーロッパに対して》果す役割を，こうした努力が《ポーランドの》社会諸関係のなかでもたざるをえない性格から導き出すのが，より正しいと考えるのである」と。(R. Luxemburg, „ Sozialpatriotrsmus", S. 463.)

った。とはいえ，マルクス・エンゲルスのばあい，それは，まだしもヨーロッパ革命の戦略から位置づけられた一定の合目的性をもっていた。しかし，ヨーロッパ革命あるいはドイツ革命の主体ではなくて，ほかならぬポーランド革命の運動主体が，この《願望》を無批判にそのままうけいれ，愛国的感情とマルクス主義を融合しようとするばあい，それは，一切の合目的性を失う。だからこそ，若きローザは，いかに願わしいことでも，願望は，それだけではポーランド・プロレタリアートの綱領にはならない，という自明のことを強調しなければならなかったのである。かの女にとって，PPS の独立スローガンは，まさに，単なる願望・主観の心情に甘えた独断であったといえよう。かの女はこのような PPS の主観的ユートピアに抗し，これを克服するために，純粋な客観性を求め，そしてあくまでもその客観に固執しようとする[4]。つまり，かの女のいう《客観的な》物質過程は，「個人の意志や政党の意図とはまったく無関係な過程」[5] として考えられているのである[6]。

---

4) またある論者は，この点を評価してつぎのように述べている。「かの女は小市民の決してもっていないものをもっている。それは客観性である。かの女は，すべてのものを，その主観性を以って観察しなかったにちがいない。すなわち，事物を，ただ自己自身を中心として観察しなかったにちがいない。」（J. Faktios, *Rosa Luxemburg. Ihre Menschlichkeit*, 高村浪夫『ローザ・ルクセンブルク』所録，224頁。）

5) R. Luxemburg, „Sozialpatriotismus", S. 466.

6) このように執拗に客観性を求めようとするかの女の態度は，しばしば批判の俎上にのせられる。その際，とりわけ問題になるのはエルスナーの評価であろう。かれは，たとえば，つぎのように述べている，「ローザ・ルクセンブルグは，一方では，非弁証法的・機械的唯物論の立場（ひんぱんに弁証法ということばを使用しているが）に立ち，また一方では，はずかしげな観念論の立場に立っていた。……ちょうどフォイエルバッハと同じように，ローザ・ルクセンブルクもまた，唯物論を徹底させることができず，最後までつらぬくことはできなかった。それは避けがたいことであった。なぜなら弁証法的唯物論だけが真に徹底的な唯物論だから。……かの女は主観と客観との弁証法的関係を理解していない。かの女においては，史的唯物論は，たんなる経済的決定論ないしは史的宿命論とでもいうべきものに代ってしまっている。かの女にとっては，客観的発展がすべてであって，人間の主体的行為は無である。……かの女は，レーニンが『一歩前進二歩後退』で革命党のプランを展開したとき，レーニンに主観主義の非難をあびせ，かの女自身はといえば，実践的にはプロレタリアートに無活動の宣告をくだす客観主義を信奉したのである」(F. Oelßner, *Rosa Luxemburg. Eine kritische, biographische Skizze*, 2. Aufl., Berlin, 1952, 杉山忠平訳「ローザ・ルクセンブルク」182-183頁，但し傍点は引用者）と。またルフェーブルも，かれの『レーニン論』のなかで，かの女を「反弁証法」家であると批判し，その根拠として「客観的なものと主観的なものとのあいだに弁証法的関連がない」（H. ルフェーブル，大崎平八郎訳『レーニン』30頁）と述べている。したがっていずれの場合も，問題は，かの女が

超越性に対する内在性の優位，主観性に対する客観性の優位，すなわちあくまでも客観のなかに内在しようとする態度，ここに，われわれは，かの女の方法的批判の性格とその成果をみることができるであろう。

では，かの女の積極的な方法の主張は，どうであろうか。かの女は，たとえばつぎのように述べている。「経済問題は，こんにち，あらゆる文明国の精神生活の前面に立っている。われわれはすでに社会全体の存在と生成のバネ die Triebfeder des ganzen gesellschaftlichen Seins und Werdens を経済上の諸問題のうちに認識してきた。われわれは，経済生活とそれから生ずる社会的諸帰結の全体を認識しないでは，一国の政治的な相貌や歴史的な運命をあきらかにすることはできない。……（だから―引用者）われわれは，社会の物質的発展のなかにその政治的発展への鍵を見出すという立場に立つことによって，すなわちポーランドの経済生活とその諸傾向に基くことによって，はじめて，ポーランド問題を解決することができるのである。」[7] そしてわれわれは，「この

思想し行動するときの主観と客観の在り方・動き方にかかわっている。なるほどかの女は，主観から独立して存在し生成する客観的な物質過程を，それとして，どこまでも純粋に認めようとする。だが，そうだからといって，それだけで，われわれは，すぐに上述のような評価を下してしまってよいものであろうか。そもそも，「客観主義」とか「反弁証法」とか「機械的唯物論」とかが云々されるばあい，それは内容的には，つぎのような立場，つまり，主体の在り方や主観の思惟の努力とは断絶したところで，主体の在り方や主観の世界を固定しておいて，ものごとの成行を静観しようとする観照的立場を，暗に指しているのであって，これは他面から見れば，そのまま1つの主観主義であるといえよう。このような《客観主義》の地平にあっては，主観的なものと客観的なものとは，終始，異質なものとして冷たく分離されたままであり，そしてこのことの方法的帰結は，客観が主観を一方的に眠らせてしまうか，それとも主観が客観をぬりつぶしてしまうか，このいずれかであろう。（ローザにとって，前者は，修正派の方法的帰結であったし，後者はほかならぬ PPS の方法的立場であった。とくに前者については，ルカーチのつぎの論文を参照されたい。G. Lukács, „Rosa Luxemburg als Marxist", *Geschichte und Klassenbewußtsein*, Berlin, 1923, SS. 39–56.）この2つの道は，一見したところまったく正反対のものと思われるかもしれないが，方法的には同一の地平にあるのであって，ローザ・ルクセンブルクがこのような地平を高く超えていたことはいうをまたない。つまりこうである。かの女は，主観の意志ではどうにもならない客観をそれ自体として認め，これを主観から突き離すのではあるが，それと同時に，この突き離した客観を主体のもとへと奪還し，こうして客観世界と主体の世界を関係づけようとする。かの女の思想と行動のなかで，主観的なものと客観的なものとは，相互に否定し転化しあう動き・かかわりあいのなかにあるといえよう。しかもその際，目的意識的に究極目標に向って収束する思惟衝動が，かの女の思想の動き・かかわりあいのなかを貫いているといえるのではなかろうか。このように考えてくると，かの女に対する上述の批判の一面性はあきらかであろう。

7) R. Luxemburg, *Die industrielle Entwickelung Polens*, Leipzig, 1898, S. I. （以下 *Entwickelung* と略す。）

観点によってのみ，ポーランド再建の闘いはほんとうにポーランド・プロレタリアートの階級的利益になるかどうか，またポーランド・プロレタリアートはこの建設を実現することができるかどうか，を決定することができるのである」[8]と。文脈のうちにうかがえるように，かの女の思想と行動にとってなによりもまず問題であったのは，ポーランド社会主義運動を闘ってゆくばあいの政治方針であった。そしてこれは，主観的心情から演繹さるべきものではなかった。そうではなくて，かの女にとって大切なことは，まず客観的な現実の物質過程にまで認識をつきつめ，そこで展開している物の流れと錯綜したからまりあいのなかから，階級関係をはっきりとつかみ出し，この階級関係の認識のうえに立って，プロレタリアートの階級的力量をたかめうるような政治方針を提起すること，これであった。しかも，階級関係はほんらい全体的な傾向としてはじめて認識されるものであるから，これを認識するためには，社会現象の個々的な一時的な事実をとらえるだけでは不十分であって，むしろこのような個別性にひきまわされるのではなくて，「社会全体の存在と生成」[9]を，したがって究極的には「経済生活とそれから生ずる社会的諸帰結の全体」[10]および「経済生活の諸傾向」[11]を，問題にしなければならないというわけである。以上，要するに，《現実社会の客観的な物質的展開過程を，全体としてそして傾向として，認識すること》，これが，かの女の方法意識であったといえよう。この点について，『ローザ伝』の著者フレーリッヒ P. Fröhlich は，つぎのように述べている，「歴史的に批判するということは，かの女にとっては，個々の現象のすべに共通な根源を探ることであり，発展の推進力を探りあてることであり，そして矛盾の解決をもたらすジンテーゼを探究することであった」[12]，あるいは「ローザ・ルクセンブルクをひときわ際立たせたものは，ものごとをヴィヴィッドにみようとすることから生れる弁証法であった。……この弁証法のお蔭で，かの女は，日々の闘争のあらゆる個別現象を，発展の全体的な流れとの関係でみることができた

8) R. Luxemburg, „Neue Strömungen", S. 179.
9), 10), 11) R. Luxemburg, *Entwickelung*, S. I (Vorwort).
12) P. Fröhlich, *Rosa Luxemburg. Gedanke u. Tat*, 2. Aufl., Hamburg, 1949. S. 23.

し，またそれを革命の究極目標へ向けて整理することができたのである」[13] と。

このようにみてくると，かの女の方法意識は，同時に，より本来的には，マルクスのそれでもあった。事実，「ローザ・ルクセンブルクは，マルクスの分析の個々の結論が大切なのではなくて，マルクスの方法論が大切であることを繰返し指示した」[14] といわれている。しかしそれは，マルクス主義の方法をアプリオリな仕方で安易に適用しようとするものではなくて，そうではなくて，マルクスの方法をポーランドの運動のなかで主体的に自分のものにしようとする激しい方法意識に支えられてのことであったといえよう。

V ポーランド革命論

ローザ・ルクセンブルクは，前節で検討した方法意識に支えられながら，マルクス・エンゲルスのポーランド論を内容的に克服し，そしてみずからは，ポーランド史の分析を槓杆にして独自のポーランド革命論を確立してゆく。この節におけるわたしの課題は，このような若きローザの理論的努力を検討することである。

さて，何度となく指摘してきたように，マルクス・エンゲルスのポーランド論は，所謂ポーランド論すなわち防壁論とその補論としてのポーランド二段階革命論から構成されていた。若きローザはこの2つの議論がすでに歴史的に支持できなくなったことを示そうとするのである。では，どのようにか。

まず，所謂ポーランド論であるが，これに対するローザの批判点は，だいたいつぎの3点にまとめることができよう。

第1に，ローザは，マルクス・エンゲルスの所謂ポーランド論の根柢をなしていたかれらのロシア観がロシア社会の内的変質によってすでに通用しなくな

13) R. Luxemburg, *Gesammelte Werke*, Bd. III, *Gegen den Reformismus, Eingeleitet und Bearbeitet von Paul Fröhlich*, 1925, S. 3. また櫛田民蔵もかれの「ローザ・ルクセンブルクの思い出」のなかで，かの女の書簡に言及しながら，つぎのように述べている，「事物を個々バラバラに切り離さずに，いつも全体の一部として有機的にみてゆこうとすることが，事物に対するかの女の態度であった」（『櫛田民蔵全集』第1巻，303頁）と。

14) K. Radek, *Rosa Luxemburg*, 高村浪夫訳『ローザ・ルクセンブルク』58頁。

ったことを指摘する。すなわち，「ロシアは，30年まえにはまだそうであったような絶対的な社会的閉塞状態にもはや沈みこんでいない。いまや，若いもぐら――資本主義――が，その土台を掘りくずしつつある。そしてこのことが，絶対主義を内部から打倒するための保証を与えているのである。ロシアは，銃剣だけではなしに，闘うプロレタリアをも提示しているのだ」[15] と。そしてこのようなローザの注目が，晩年のエンゲルスのそれでもあった――PPS によって故意に看過されたのではあるが――ということは，すでに言及したとおりである[16]。

第2に，ローザは，国際政治の力点の変化をあげている，すなわち，「ポーランドの統一がプロレタリアートの対外政策の公準にまで高められたとき以来，世界は大きく変った。いまや，ヨーロッパの政治情勢は以前とはちがった相貌を呈している，すなわち，政治情勢の力点は，東から西へ，つまりポーランド問題から独仏国境へと移っている」[17] と。

この2点は，ロシア社会の内的変質にしても，国際政治の力点の変化にしても，いずれも，ロシア以外の闘うプロレタリアートにとっては，いわば外的な条件の変化であった。しかし，ローザ・ルクセンブルクがかれらの所謂ポーランド論を歴史的に支持できないものとして批判するばあい，その非歴史性の核心は，プロレタリアートのおかれている物質的基礎過程の変化およびそれに規定されたプロレタリアートの闘いの在り方そのものの変化にあったのである。これが，かの女の批判の最後の点である。前者つまり物質的基礎過程の変化について，かの女はこう反問している，「国際的な交通の網が全面的にしかれ，あらゆる国家が互いに経済的に依存しあっているこんにち，ヨーロッパをロシアから自然地理的に区別することが，いったいなにほどの意味をもちうるのであろうか」[18] と。このようにかの女は，資本主義が世界的なひろがりをもった単

15) R. Luxemburg, „Sozialpatriotismus", S. 463.
16) R. Luxemburg, „Neue Strömungen", S. 212. なおこの点については，前稿の註 (32) を参照せよ。
17) R. Luxemburg, „Sozialpatriotismus", SS. 462-463.
18) R. Luxemburg, „Neue Strömungen", S. 213.

一の経済機構として展開してゆく過程に注目している。そしてこのような経済過程の認識の上に立って，かの女は，後者の変化を，つまりプロレタリアートの闘いの在り方の変化をつかんでいる。それは，48年型のバリケード戦からストライキを主要な武器とした大衆的な日々の政治闘争[19]へと変化してゆく流れであった。だから，かの女にあっては，「ロシアの反動がヨーロッパに対して外交上の影響力をもつにしても，それは，自然の城壁によってではなくて，自国のツァリズムを絶滅する闘い（それは日々の大衆的な政治闘争であった—引用者）によってはじめて廃棄されうる」[20]のであった。

以上の批判によって，かの女は，マルクス・エンゲルスの所謂ポーランド論が闘うヨーロッパ・プロレタリアートの対外政策上の《公準》としてもすでにユートピアでしかなくなった，と結論するのである。では，次にポーランド二段階革命論に対するかの女の批判はどうであろうか。

そもそも，かの女の問題は，なによりもまずポーランド社会の解放であった。ポーランド人民による・ポーランド人民のための・ポーランド革命であった。しかし，ドイツの運動主体ではなくて例えば PPS のようなポーランド革命運動の主体が，ポーランド独立のスローガンを掲げたからといって，それは，ポーランド社会に内在した内面的な要求となるであろうか。それは，ほんとうにポーランド人民による・ポーランド人民のための・ポーランド革命論となるであろうか。これが，ポーランド二段階革命論に対する若きローザの疑問であった。元来，マルクス・エンゲルスのポーランド二段階革命論は，すでに紹介

19) R. Luxemburg, „Sozialpatriotismus", S. 463. ここで，わたしは，「ストライキを主要な武器した大衆的な日々の政治闘争」と書いたが，ローザ・ルクセンブルクがこのように字句どおり書いているというわけではない。しかし，かの女が「日々の政闘治争」というとき，それは，SDKP へと組織的に受けつがれていく『プロレタリアート』ないしは『ポーランド労働同盟』の伝統の上に立ってのことであった。ところが，「『プロレタリアート』は，陰謀団以上であり，大衆政党以下であった」(M. K. Dziewanowski, *The Communist Party of Poland. An Outline of History*, Harvard Univ. Press, 1959. p. 16) し，その闘争形態もストライキを中心にしたものであった。また『ポーランド労働者同盟』の闘いも，経済闘争の指導から出発していた (*ibid.*, p. 18)。したがって，ローザの政治闘争は，一握りの前衛による・日常性をこえた闘いではなくて，大衆による日々の政治闘争であったといえるし，またかの女が念頭においていた闘いの形態がストライキであったこともうなづけるであろう。

20) R. Luxemburg, „Sozialpatriotismus", S. 463.

したように，つぎの一般的命題につきるものであった。そしてその内容は，《独立を失った民族にとっては，この独立を奪還しないかぎり，社会解放の可能性もありえない》ということであった。ローザの批判は，この命題の《一般性》に向けられている。すなわち，それは，――いかにマルクス・エンゲルスが主張した命題であっても，――時代を超えた一般的妥当性をもつものではなくて，かれらが育まれた歴史段階に規定されているということ，ローザの主張点はまさにこのことであった。われわれは，かの女の批判をつぎの２点にまとめて考えることができるであろう。すなわち，――

まず第１に。マルクス・エンゲルスは，階級支配の打倒と社会解放を準備する主体の条件をば，プロレタリアートの階級的力量の成熟に求める。ところで，プロレタリアートが階級として登場しその階級的力量を成熟させるためには，資本主義の物質過程が，前資本主義的な政治的桎梏から解放されて，それとして自己展開しなければならなかった。だからこのような自己展開を阻害している政治的条件は，ブルジョア民主主義革命によってブルジョア国家の民族的な統一あるいは独立という政治革命によって，除去されなければならなかった。すなわち，マルクス・エンゲルスの生きた歴史段階は，ブルジョア国家の民族的独立が資本主義発展の不可欠の前提であると同時に，それがそのままプロレタリアートの階級的成熟の不可欠の前提でもあるような，そのような歴史的段階であった。しかし，ローザ・ルクセンブルクは，むしろこのような政治的条件の如何を問わず，資本主義の物質過程が等質的な単一の世界（＝世界資本主義）を実現しつつある歴史段階の人であった。たとえば，かの女はこう述べている，「ドイツでは，経済の牽引力ないしはいわば資本主義の求心的傾向といえるものが，分断された諸邦のあいだに作用していたのであるが，ポーランドの経済発展は，まさしく反対方向に，もっと正確にいえば，３つのちがった方向に，――それぞれの部分をそれぞれの当該併合国に融合させながら――進んできたのである。このような一体化過程は，ロシア領ポーランドにおいてもっともはっきり現われたが，ポーランドの他の部分も，ゆっくりとではあれ，同

様の過程に屈伏していったのである」[21]と。つまり，資本主義の一国的な自己完結性への発展傾向よりも，むしろそれを突きくずして相互に入り組みあう資本主義の運動に，かの女は注意を向けていたのである。かの女のように，現実の物質過程を世界資本主義の世界市場的発展のなかでとらえようとするとき，政治的条件としての民族独立は，もはや，プロレタリアートの階級的成熟のための不可欠の一般的前提ではなくなってしまうということ，これは容易に理解されるであろう。

また第2に，マルクス・エンゲルスのポーランド二段階革命論は，ロシア絶対主義《体制》に対するヨーロッパ民主主義《体制》の強化を志向していた。しかも，このことがそれ自体として意味をもちえたし，またマルクス・エンゲルスはそうした歴史段階の人でもあった。ところが，ローザは，このような《体制》の建前の上でのちがいを疑う。かの女の歴史感覚は，《体制》のそれぞれの意味が内容的に崩壊し，その底に，《体制》のちがいを超えた等質的な世界つまり資本主義的階級社会が形造られているのを見透している。このようにかの女は，ポーランド二段階革命論の暗黙の前提になっていた体制間矛盾の一般的妥当性を否定し，資本主義社会の階級矛盾にとくに注意を向け，これをとりだし，この矛盾にそれ自体の運動を保証しようとするのである。

以上2点にわたってみてきたように，ローザ・ルクセンブルクにとっては，マルクス・エンゲルスのポーランド二段階革命論が前提している一般的命題は，歴史的に限定されたものであって，ポーランドの歴史的現実に即したものではなく，したがって，それは，真に闘うポーランド革命論となることはできなかったのである。

こうして若きローザは，マルクス・エンゲルスのポーランド論の内容的批判をおわるわけである。そしてすでに示唆したように，みずからは，ポーランドの歴史のなかに深く身を沈め，その分析をとおして，みずからのポーランド革命論をあたためてゆくのである。そこで，われわれは，かの女のポーランド史

21) R. Luxemburg, „Neue Strömungen", S. 180.

の分析の跡をたどることにしよう[22]。

1820年から50年までのポーランド経済は，マニュファクチュアの段階にあった。この時代には，全国商品流通に必要な行政上・立法上の一連の改革，国道や運河などの産業基盤の整備，経済活動の中核としてのポーランド銀行の設立などが行われるが，とくにかの女が注目しているのは，ツァーの勅令による諸特権の賦与を槓杆としたドイツ人工業移民の助成，独領および墺領ポーランドとの・したがって結局はドイツおよびオーストリアとの・ロシア領ポーランドの自由な商業交通の保証，そしてロシアとの関税率協定（22年および24年）によるロシア・ポーランド間の緊密な貿易関係の樹立，であった。――かの女は，ロシア経済とポーランド経済が有機的に一体化してゆく傾向の素地あるいは萌芽を，この段階にみているのである。――それはともかく，当時の工業発展の主要なバネとなってポーランド・マニュファクチュアを担っていたのは，織物工業と織物貿易であった。つまり，織物工業は，ドイツ半製品の加工工業として，また織物貿易は，ロシア販売市場に依存したかたちで，ポーランド・マニュファクチュアの発展を担ったのである。ポーランド工業がこうしたマニュファクチュアの段階から真の工場工業の段階へと発展してゆくうえで決定的な里程標を画することになったのは，ロシア・ポーランド間の関税国境の廃止（51年）とそれにもとづくロシア経済への一体化傾向の定着であった。とはいっても，こうした発展を現実のものとするには，第1に，ポーランド・マニュファクチュアの拡大能力が飛躍的にたかめられなければならないし，第2に，ロシアとの経済的一体化といったところで，それを実現する近代的交通機関が敷設されなければならないし，最後にロシア経済が，農奴制下の土地経済から解放されて，市場の狭隘な枠をうち破らなければならなかった。そしてこれらの阻止要因の一つ一つを克服してゆく70年までの過程は，そのまま，ポーランド大

22) わたしは，ローザ・ルクセンブルクによるポーランド史の分析とかの女のポーランド革命論を，主としてつぎの文献によりながら展開した。① *Entwickelung*. ② „Sozialpatriotismus", ③ „Von Stufe zu Stufe.....Zur Geschichte der bürgerlichen Klassen in Polen", *Die Neue Zeit*, Jg. 16, Bd. I, 1897.

工業の《現実》をかちとってゆく過程でもあった。すなわち，こうである，——まず第1に，53年に勃発したクリミア戦争は，ロシアが海上封鎖を敷くことによって，ポーランドに通過貿易という漁夫の利を与え，繊維工業は，技術の上でも貿易の上でも，大いに発展し，こうしてポーランド工業の拡大能力は飛躍的に高められた。また第2に，ロシアの遠隔地とポーランドを結ぶ一連の鉄道建設は，ロシア・ポーランド間の産業パイプを実現したし，最後に，61年のロシアの農奴解放は，商品貨幣経済の発展に大道をひらき，ロシア販売市場を魅力あるものにした。かくて，51年の関税国境の廃止いらい20年にして，ポーランド大工業は《現実》となった。そしてロシア帝国政府が77年に金関税を導入し益々厳格な保護関税政策を追求することとなり，ポーランド工業は，この温室的環境のなかで生産の拡大と技術の革新をすすめ，熱狂的な蓄積の時代に入るのである。

では，この間，このような経済発展に規定されながら，ポーランドの階級関係はどのように進展するのであろうか。

マニュファクチュア時代のポーランド資本主義経済は，それをポーランドの全生産活動のなかでみると，50年代においても，否，60年代においてすら，まだまだ第二義的な役割しか果しておらず，「ドイツ人のペテン」[23]とか「外国の有毒植物」[24]としてみられていたにすぎなかった。資本主義経済はまだ他所者であって，経済上の指導的役割は土地所有と土地経済の手中にあった。つまり，60年までのポーランドは《貴族》の国であった。貴族は，経済生活はもちろん，精神生活・政治生活をも分離主義的なヘゲモニーのもとに支配し，ロシア・ツァリズムとそれに擁されたブルジョア発展の一歩一歩に対して闘っていた。したがって，この段階では，「政治的独立の問題と民族文化防衛の問題は，まだ一つの調和した全体に統一されていた。貴族は，《政治的隷属に反対して》闘うことによって，ポーランドの独立とポーランドの文化を共に擁護していた」[25]のであった。しかし，大工業への過渡期もなかばをすぎ60年段階にもなると，

23), 24) R. Luxemburg, *Entwickelung*, S. 9.
25) R. Luxemburg, „Von Stufe", S. 175.

ポーランド・ブルジョアジーは，経済的な栄光の階段を一歩一歩のぼり，一応，経済上の支配の座につくことができた。しかし，この経済的支配の座は，70年代末あるいは80年代に至るまでは，まだそれほど堅固なものではなかった。政治的従属を正義として誰はばからず宣言するだけの力量を，かれらはまだもっていなかった。だからブルジョアジーは，ブルジョア的利得を懐に入れるために，貴族の民族闘争と妥協し，ロシアによるポーランド併合は不正であるといいながら，既成事実としてはこの併合をポーランド社会のなかに根づかせることを考えた。つまりかれらが考えたのは，被抑圧社会の観念的要求に表現を与えると同時に，それを隠れ蓑として利用しながら，その蔭で純粋利潤の崇拝を宣言するような，そのような妥協であった。これが60年代から70年代末までのブルジョアジーの階級綱領であった。《有機的労働綱領》 das sogenannte „Programm der organischen Arbeit" と呼ばれるのが，それである。綱領の主張は，こうである。——民族の武力闘争は民族独立のためになにも生みだしはしなかった。むしろ，独立のために必要なのは，武力ではなくて民族の内的統一である。しかもこの内的統一を用意してゆくものは，物質的・精神的手段とりわけ民族の富裕を内容とする物質的手段であって，ポーランド民族は，この手段の獲得のために，一体となって協力しなければならない——というわけである。したがって《有機的労働綱領》にいう政治的解放つまり民族独立は建前であって，本当は資本主義的物質欲の充足のための政治的禁欲こそ，かれらの目的であった。それは，要するに，貴族民族闘争の解毒剤，ポーランド・ブルジョアジーの福音書であったといえよう。したがって，80年代の全ヨーロッパ的農業危機のなかで広汎な貴族土地所有が壊滅的な打撃をうけ，貴族社会が瓦解するとき，この綱領はブルジョアジーにとって，もはやなんの必要もなくなった。階級利害を胡塗するための一切の妥協は過去のものとなった。ポーランド工業は，ポーランド社会のあらゆる生活領域を，自己のもとに従属させ，自己の利害によって，秩序づけることができた。ロシア市場を槓杆とする資本主義的利得は，民族独立を建前として掲げなくとも，それじたい自己目的として

登場することができた。ポーランドは，いまや，典型的な資本主義国になったのである。しかもそれは，政治的従属《にもかかわらず》ではなくて，政治的従属《のゆえにこそ》その発展が保証されるポーランド資本主義であった。

以上のポーランド史の分析の上に立って，ローザ・ルクセンブルクは，ポーランドの経済および政治の現実をどのようにとらえたのであろうか——われわれは，つぎにこの点に関するかの女の見解を検討しよう。

ポーランド大工業の生成と発展は，ロシアの販売市場をぬきにしては，したがってまたロシア帝国政府の関税政策をぬきにしては，考えることができなかったし，これからも考えることができない。ロシアとポーランドとの経済関係は，共通の販売市場と共通の関税国境そして生産における広汎な分業を物質的基盤として，外に対しても内においても，利害の調和を実現している。それは，同様の基盤から同時に生れてくる利害の対立をもそのうちに包摂し，こうして1つの《利益共同体》を構成するに至っている。したがって，ロシア帝国政府の経済政策は，個々的にはジグザグのコースをたどるにしても，全体の傾向としては，この《利益共同体》の地平で，ポーランドとロシアのブルジョアジーの《全体としての》利益を代表し，こうしてポーランドをも含めた帝国経済全体の《一定の構成》を実現してゆかなければならない。ポーランド工業もこの《構成》のなかで位置づけられるのである。しかもロシア帝国政府が中国・ペルシャ・中央アジア・バルカンなどの世界市場へ向って経済的に進出することを考えるとき，ほんとうに解決しなければならない問題は，ロシア工業の技術的後進性とモスクワ・ブルジョアジーの経済的保守主義との悪循環をどうして断ち切るのか，ということである。そしてこの点で究極的な鍵を握るものがロシア帝国内部の先進的工業ブルジョアジーとりわけペテルブルクとポーランドのブルジョアジーであることはいうまでもなかろう。とすれば，ポーランド・ブルジョアジーは，永続的にツァリズムの盟友として，ロシア経済と不可分の関係に立つことになるであろう。さらに，こうした経済過程の進行は，政治過程をも規定している。すなわち，ポーランド・ブルジョアジーは帝国政府

の経済政策への介入を画策し，いよいよ政治的な下僕になりさがりつつあるし，他方，没落をまぬがれた大貴族は，絶対主義を支持すべく運命づけられた階級という本来の面影をとりもどしつつある。ブルジョアジーと貴族，したがってポーランドの全支配階級は，《全ポーランド》の名において団結し，ロシア絶対主義への従属を深め，政治的にもロシアへと一体化しつつある。——これがローザの現実認識であった。

では，このようなかの女の現実認識のうちから，どのように，ポーランド革命論が提起されてゆくのであろうか。すでにみてきたように，ロシア経済とポーランド経済は有機的に一体化しつつあり，そしてこの傾向に規定されながら，ロシア・ツァリズムとポーランド政治社会はいよいよ政治的に一体化しつつある。この経済的・政治的一体化過程は，逆の面からみれば，ポーランドがあらゆる意味での自己完結性を失ってゆく過程でもあろう。このような動きを反映して，一方では，ロシアとポーランドの絶対主義勢力が《独裁政治の千年王国》を夢み，他方では，ロシアとポーランドのブルジョアジーが《資本の千年王国》を夢みている。しかしこの同じ物質質過程は，同時に，これらの夢の観念像をうちくだきポーランド社会を真に解放するための主体的条件をば，用意しつつある。それは，すなわち，ロシア・プロレタリアートとポーランド・プロレタリアートのインターナショナルな団結にほかならない。したがって大切なことは，このようなプロレタリアートの闘いを《民族》のちがいによってひきさくことではなくて，そうではなくて，ツァリズムと資本主義の支配に真向から対決しこれをのりこえてゆくインターナショナルなプロレタリア《階級》の闘いを推し進めることである[26]。——これが，ポーランド史の分析のなかであたためられ，そのなかから提起された若きローザのポーランド革命論であった。

Ⅵ　結　　語

これまでの論述のなかでわたしが考えてきたことは，——ポーランドにおけ

26) R. Luxemburg, *Entwickelung*, SS. 90–92.

る若きローザの行動にとって，何が，どのように，問題であったのかということ(第Ⅱ節および第Ⅲ節)，次にこの行動上の問題を解いてゆくかの女の方法意識はどうであったかということ（第Ⅳ節)，そしてこのような方法意識に支えれらて分析したかの女のポーランド史およびそのなかから提起されたポーランド革命論はどのような理論的内容をもっていたのかということ（第Ⅴ節)，以上であった。そこで最後に残されたわたしの課題は，このような展開を立体的にからませて，このからまりのうちに，かの女の思想の全体像をさぐり，それを思想の《構え》としてはっきりさせること，これである。そしてここで，わたしが「思想の《構え》としてはっきりさせる」というのは，――ローザ・ルクセンブルクの思想のなかで，社会のとらえ方・闘う主体の設定とその在り方・そして両者の結接点としての行動あるいは実践のとらえ方が，それぞれどのような内容をもち，どのように相互に連関しているのかということ，これを，はっきりさせることにほかならないのである。

まず第Ⅰに，社会のとらえ方あるいは資本主義観についてであるが，かの女は社会を世界市場的発展としてとらえている，つまり，《国境をこえ民族をこえ体制をこえて一様に資本主義的階級社会をつくってゆく資本主義の直線的連続的な全面化傾向》，これが，かの女の資本主義観であった。このような資本主義観に立つとき，一方では，後のローザにみられるように，段階としての資本主義というとらえ方が欠落してゆくし[27]，また他方では，資本主義の構造的な諸問題に対する関心が欠けてゆくのも自然の勢いであったろう。さしあたり後者についていえば，たとえば，前資本主義的な社会関係の残滓が資本主義的発展のなかで変容を蒙りながらも残ってゆく側面，あるいは前者が後者に影響を与え後者の在り方を規定してゆく側面は，見落されてゆき，したがって，一国資本主義の個々的な問題に対しては一つ一つ具体的に対応することができないということになる。これは，一国資本主義よりも世界資本主義に注目し・生産

27) かの女はこのような資本主義観に立っているために，後の『資本蓄積論』にみられるように，《段階》としての帝国主義というとらえ方ができなかったのではなかろうか。この小論ではこの点に深く立ち入って展開することはできない。

の場よりもむしろ商品流通の次元で問題をたてたローザには避けることのできない帰結であった。しかし，かの女は，このように流通の次元でではあれ，世界資本主義に注目することによって，資本主義社会を，全体として・傾向としてつかむことができたのである。そしてこのような姿勢があってはじめて，かの女は，当時の資本主義の現実のなかで，ポーランド資本主義の動きを生き生きととらえることができたのであって，われわれは，この点を高く評価すべきであろう。

第2に，かの女は，闘う主体をどのように設定し，その在り方をどのようなものとして提起していたのであろうか。かの女は，ポーランドの闘いのなかで，プロレタリアートを他の諸階級の影響から切り離し自立的に自己運動する階級として登場させることに，全力をあげていた[28]。かの女のばあい，ポーランドの闘いを将来的に担いうる主体は，より厳密にいえば，ポーランド人民ではなくて，ポーランド・プロレタリアートであった。そしてこのプロレタリアートに向っては，つぎのような団結が要求される，すなわち，——第1の点で触れた資本主義観に規定されながら，ポーランド・プロレタリアートとロシア・プロレタリアートの団結を主要な内容とするプロレタリア・インターナショナリズムが，国境・民族・種族・語族・体制などがあらゆる障壁をこえたプロレタリアートのインターナショナルな団結が，要求されるのであった。しかも，一様にプロレタリア・インターナショナリズムといっても，それは，かの女のばあい，アプリオリに通用する教条ではなくて，ポーランドのナショナリティを深くかいくぐって得られるべきものであった。すなわち，ポーランドのナショナリティはナショナリティの止揚によってしか解放されないと

28) ローザ・ルクセンブルクは，『ポーランドにおける社会愛国主義』の I の後半で，ポーランド社会の階級分析を行い，この上に立ってポーランド・プロレタリアートの闘争主体としての自立性を主張している。この点については，ラデックもつぎのように述べている。すなわち，「かの女は，ポーランド社会主義の綱領闘争のなかで，プロレタリアートのブルジョアジーからの分離の問題を考え通した」（高村浪夫訳，前掲書，59頁）と。また『プロレタリアート』のばあい「肝腎なことは，労働者階級を他の諸階級からもぎはなして，労働者階級のなかに，その独自の使命感をよびさますことであった。」(P. Fröhlich, *a. a. O.*, S. 34) とすれば，かの女は，やはり『プロレタリアート』の子であったといわなければならないであろう。

いうのが，かの女の主張であったといえよう。このようにかの女は，ポーランドの歴史的現実のなかから，ポーランド・ナショナリティの解放の主体を，ポーランド・プロレタリアートに，それもインターナショナルな団結に支えられたポーランド・プロレタリアートに求めることになったのである。この辺の事情について，コール G. D. H. Cole は，つぎのように言及している[29]，——プロレタリアートへのこのようなかの女のアプローチは，第1には，かの女がユダヤ人の生れであったことから説明されるし，また第2には，ポーランド民族主義の極端な排他性への反撥として説明される。しかも，この第2の点は，ローザが民族問題に対してニヒルな態度をとっていたという普通よくなされる批判にかかわっている[30]。最後にかの女のアプローチは，民族の内部における種族・諸族などのちがいから生ずる差別やこうした差別が社会にあたえるゆがみから，一挙にそして全面的に，ポーランド社会を解放する主体を，プロレタリア《階級》に求めるということであった。そしてこうしてはじめて，ポーランドの民族運動では収約できないユダヤ人の職工や商人そしてルテニアの農民などポーランド人以外の劣等人種をも運動のなかにひきいれ，かれらを含めて，全人民的な解放をかちとることができるであろう，——というのであった。だから，かの女がポーランド・プロレタリアートを闘う主体として設定してゆくばあい，それは，実在するこれこれのプロレタリアからなるレアルなプロレタリアートそのままであったというのではなくて，むしろ，同時にすぐれてイデアールなかたちでのプロレタリアートへの志向があったのではなかっただろうか。事実，かの女が理論的に代表した SDKP は，組織的には主として職人層に依拠しており，プロレタリアートの中核ともいうべき組織労働者は，おおむね PPS に奪われていたといわれている[31]。それはともかく，ポーランドの諸

29) G. D. H. Cole, Chap. XI. Poland—Rosa Luxemburg, *The Second International*, Part I, London, 1956, pp. 501-502.

30) T. Cliff, *Rosa Luxemburg*, 浜田泰三訳，現代思潮社，94頁。

31) 「1896年から1905年のあいだ，ロシア領ポーランドの労働運動とくに産業労働者の運動をまだ圧倒的に支配していたのが，PPSであったということは，その道の資料がすべて一致して示すところである。社会民主党員は，リトアニアに狭い足場をきずき，職人のあいだに，とくにワルシャワの靴直し工のあいだに若干の人気を博した。」(M. K. Dziewanowski, *op. cit.*, p. 16)

階級・諸階層のなかからプロレタリアートをとりだし，これにポーランド解放の主体を求めることによって，かの女は，きたるべき革命の真に主体的な条件を準備するという問題に答えていたといえよう。

国境・民族・体制をこえて直線的連続的に全面化してゆく資本主義的階級社会のなかで（第1の点），国境・民族・種族・語族・体制などあらゆる障壁を超えたインターナショナリズムに支えられながら闘うポーランド・プロレタリアートの（第2の点），したがってローザ・ルクセンブルクの実践は，どのような型と内実をもつものであったか。これが第3に検討すべき点である。すでにみてきたように，SDKP の・したがってローザの実践は，——これを実践の型という点からみるならば——48年型のバリケード戦に象徴される政治闘争ではなくて，そうではなくて《ストライキを主要な武器とした大衆的な日々の政治闘争》であった。否，もっと的確にいうならば，《工場における組織的反乱》[32] こそ，かの女の実践であった。そしてマルクス・エンゲルスとはちがった歴史段階の人としてのローザ・ルクセンブルクにしてはじめて，実践の形態をこのようなかたちでとらえることができたのだといえよう。しかし，このような実践のとらえ方にとどまっているかぎり，それは，闘いのイメージとしては具体的であっても，革命戦略としては抽象的たるをまぬがれないことも同時にいえることではなかろうか。実際，かの女は，ポーランド革命の戦略・戦術を，組織の実践として具体化できるような仕方では提起できなかったのではなかろうか。きたるべき革命をプロレタリア革命と考えるかブルジョア革命と考えるかについて，かの女はレーニンほどには厳格ではなかった，というコールの言及[33] は，この点にかかわるものであったし，このことは，たしかに，PPS にお

というわけである。ちなみに，19世紀後半のロシア領ポーランドにおける労働者構成の推移をみてみると，こうである。《ロシア領ポーランドの労働者構成の推移》

	産業労働者(人)	職工数(人)
1864年	78,000	90,000
1900年	300,000	140,000

32)「しかしながら，こんにち，プロレタリアートは，日々政治闘争を闘っている。しかも，かれらはその政治闘争で決して街頭に駆られることはないだろう。」（R. Luxemburg, „Sozialpatriotismus", S. 463.（傍点は引用者）なおこの点については，註（23）をも参照されたい。）

33) G. D. H. Cole, *op. cit.*, pp. 505-506.

おむね組織労働者を奪われていた SDKP の組織的な弱さに制約された革命家ローザの欠陥ではなかったか。しかしそうはいっても，かの女の実践は，——これをその内実の点からみるとき——《全人類の解放をその究極目標とする実践》にほかならなかった。かの女は終始一貫して，実践を《全人類の解放をその究極の目標とする実践あるいは全人的人間解放と社会革命の実践》としてとらえていたし，またこのような実践のなかに，マルクス主義の真髄を求めていたのである。そしてわれわれもまた，若きローザのこのような実践のとらえ方およびマルクス主義理解のうちに，かの女の思想の最大の魅力を求めることができるであろう。

要するに，かの女は，《全人的人間解放と社会革命の実践》を行動の泉としながら，それを客観的に可能にする条件を，《国境をこえ民族をこえ体制をこえて一様に資本主義的階級社会をつくってゆく資本主義の直線的連続的な全面化傾向》に求める，そして闘う主体の側には，このような客観世界のうごき自体のなかから生み出される《プロレタリア・インターナショナリズム》が提起される。——これが，ローザ・ルクセンブルクの思想の《構え》であったし，かの女のマルクス主義理解であった。われわれは，このような思想のからまりあいのうちに，かの女の思想生命の躍きある全体像をみることができるであろう。

（付記　ローザに関する最新の研究 J. P. Nettle, *Rosa Luxemburg*, 2 vols., Oxford U. P., 1966 を，小論では参照することができなかった。この論文については，後に改めて考察するつもりである。）